



Title	俳句
Author(s)	山田, 平歩
Citation	懐徳. 1937, 15, p. 69-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88984
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

和歌

滿州

爾靈山の石に混れる藥莢マジヤクキヤウを子供等拾ひ旅人に賣る（旅順）

駆足で上る爾靈山の石ころ道草いきれ暑う汗に惱めり（旅順）

いかめしき警乗兵の乗りこめるこの夜行列車の客となりけり（滿鐵）

神の世の大森林が石炭スに化し今の現カツに糧を與ふる（撫順）

道といふ道はあらざり砂ぼこりうづまく荒地ひた走り行く（法輪寺）

俳句

山田平歩

洞か峠

一句

青芒一鳥を見ぬ峠かな

晉代湘園

晉代

湘園

無思量によりて涼しき寺の縁
實をつけて萬兩の花咲きにけり
不立文字

放下せよと僧の言ひける涼しさよ
一日不作一日不食

作務了へし僧もどり来る蟬の中

○

曼陀羅の縁起を聞くや春の水
野々宮の御垣に牛や竹の秋
落葉松の林を出でゝ夏の湖
少しばかり刈り残しある刈田かな
瀧の上の紅葉に夕陽残りをり

澤

北

斗

白井文溪